

Pāli Udāna 研究 (1)

本 庄 良 文

パーリ小部の第三支分, *Udāna* は、伝統的に、ブッダ自身が、折折の内面的高揚に衝き動かされて詠いあげたものとされる韻文(時として散文)に、因縁譚を付加した經典、八十篇を集成したものである。全体は、個々の編集意図に基き、十経ずつの八章に分割されている。章名を左に、そのおおまかな主題を右に記すと次のようになる。

- | | |
|-----------------------|---|
| I. Bodhi-vagga | 真の婆羅門 (brāhmaṇa) |
| II. Mucalinda-v° | 楽 (sukha) |
| III. Nanda-v° | 比丘 (bhikkhu) |
| IV. Meghiya-v° | 心 (citta) |
| V. Sonatherassa v° | 賢者 (kusala, paṇḍita…) |
| VI. Jaccandha-v° | 悪しき見解 (diṭṭhi) |
| VII. Cūla-v° | 輪廻の流れ (ogha, saritā, etc) と煩惱 (taṇhā, bandhana) |
| VIII. Pāṭaligāmiya-v° | 涅槃 (nibbāna) |

有部に於ては、パーリ *Dhammapada*, *Udāna* に相当する諸偈は、共に *Udānavarga* に含まれている。これは、前二テキストが、ある程度の等質性を具えていることの証左であると見てよい。しかし、パーリ *Udāna* の性格として特筆すべきは、その思想内容が、ほぼ専ら出家修行者を対象にした、世俗との妥協を許さぬ、厳しい教えである、ということである。この事実は自ずと、*Udāna* に、地味な性格を付与することとなる。

それゆえにでもあろうか、*Udāna* は従来その重要性に値するだけの注目を受けてはこなかったと言えよう。たとえば、*Dhammapada*, *Suttanipāta*, *Thera-therigāthā*, *Vinaya* 等には、我国の内外で、多くの韻文パラレル表が発表されているけれども、この *Udāna* のパラレルは、梵文 *Udānavarga* 校訂本を介して初めて知りうるのみである。この書を独立に扱った論文も少なく、大ていば、*Udānavarga* や法句経類との関連に於て言及されるのが普通である。

この傾向とは独立に、文献史家は *Udāna* をかなり古いものと見ており、M. Winternitz に至っては、この經典の中には、ブッダ自身の発した偈が含まれているかもしれないとさえ言っている。彼は特に論拠を示してはいないのであるが、*Udāna* を古いと思わせる要素の二三は、すぐに挙げる事ができる。例えば、“vedagu” (II. 6, VIII. 7), “vedantagu”, “brahma-vāda” (I. 4), “brāhmaṇa” (I. 1~10) といった、正統思想所産の概念を仏教の文脈の中で肯定的に用いる例や、*Suttanipāta* の *Aṭṭhaka-vagga* の中心主題である「論争の超越」の文脈で頻出する “diṭṭhe sute…niviṭṭhā” なる表現 (VI. 9), 独立の語としては最初期仏典にしかほとんど見られない “upadhi” の語 (II. 4, VII. 10), “lapetave” なる古風な不定詞形 (III. 1), “-āse” で終る -a 幹 masc. nom. pl. (II. 7) などがそれである。

しかし、それにも増して決定的な事例は、Winternitz のいわゆる「沙門文学」の特徴を具えた、ジャイナ教典や、叙事詩との平行、類似句の存在であろう。*Udāna* II. 2 の、

yaṃ ca kāmasukhaṃ loke, yaṃ c'idaṃ diviyaṃ sukhaṃ /
taṇhakkhayaasukhass'ete, kālaṃ n'agghanti soḷasim //

という偈が、*Mahābhārata* Mokṣadharmā 章の、

yac ca kāmasukhaṃ loke, yac ca divyaṃ mahat sukhaṃ /
tṛṣṇāksayasukhasyaite, nārhaṭaḥ ṣoḍaśim kalām //

とよく符合し、有名な、「群盲象をなづ」の喩えのあとに誦される *Udāna* VI. 4, 5 の二偈が、*Sāyagaḍaṅga* I. 1. 2. 31, 32 と関連するであろうことは、既に指摘されている。

これらの例は、単に、*Udāna* の古さを証明するに止らず、その思想史的重要性をも明らかにするものであるが、先程述べた、このテキストの「世俗との妥協を許さぬ厳しい」傾向を大きく規定するものと言ってよい。

同様の事例を三つ挙げることによって、このテキストの重要性をさらに強調しておきたい。そのうち、第一と第二のものは、ただ単一の偈文どうしが、いわば点と点の対応を見せるだけでなく、偈文群どうしが内的関連を保っているという例であるから一層重要である。詳しく論じる余裕はないので簡単に報告するにとどめておく。

[1] 第一の例は次のようである。

āyantim nābhinandanti pakkāmantim na socati /
saṅgā Saṅgājamim muttam tam ahaṃ brūmi
brāhmaṇam //

女がやって来たといって喜ばず、去つていったとい
って悲しまず、執着から自由となったサンガーマジ、
彼こそを私は〔真の〕パラモンと呼ぶ。

jo na sajjai āgantum pavvayanto na soyā /
ramai ajjavayaṇaṃ(mi) taṃ vayaṃ būma māhaṇaṃ //

〔親類、縁者の居る所へ〕行こうと執心せず、〔そこか
ら〕立ち去る時に悲しまず、聖者の言葉を喜びとする人、
彼こそを我らは〔真の〕パラモンと呼ぶ。

Dhammapāda 最終章 *Brāhmaṇavagga*, *Suttanipāta* vv. 620-647 の, “tam ahaṃ brūmi brāhmaṇam” で終る詩句群と, *Uttarajjhāyā* 第XXV章の “taṃ vayaṃ būma māhaṇaṃ” で終る詩句群との関連に就ては, J. Charpentier の指摘^①があつて夙に有名であるが, *Udāna* 第一章にも類例が二つあり, これはそのひとつである。先にも触れたように, *Udāna* 第一章は, 章名こそ “Bodhivagga” であるが, そこに含まれる十詩節は全て “brāhmaṇa” の語を含み, *Dhammapāda* 最終章等と主題を共有する。その主題とは言うまでもなく, 正統婆羅門教の伝統的な〈生れゆえの婆羅門〉という觀念に〈内面の崇さゆえの婆羅門〉の概念を対置するということである。それは, あくまで内向的なものでありながら, 同時に, 「われわれ沙門こそが, 真の婆羅門である」という宣言にほかならず, 思想的市民権獲得への叫びでもあつた。両詩句についての詳細は, 別の機会にゆずる。

[2] 第二の例は以下のものである。

yassa jito kāmakaṇṭako akkoso ca vadho ca bandhanañ ca /
pabbato viya so ṭhito anejo sukhadukkhesu na vedhati sa bhikkhu // (*Udāna* III. 3)
jo sahai hu gāmakaṇṭae akkosapahāratajanāo (ya) /
bhayabheravasadda sappahāse samasuhadukkhasahe ya je sa bhikkhū // (*Dasaveyāliyasutta* X. 11)

共に, 悪罵, 殴打, 捕縛などの人爲による苦難を耐え忍ぶべきことを詠うものである。先に紹介したように, *Udāna* 第三章の主題は比丘のあるべき姿というものである。ここに含まれる詩句は, すべて “bhikkhu” の語を有し, *Dhammapāda* 第二十六章と通いあうものがあつて, 第一の例と類似している。

一方の *Dasaveyāliya* 第十章は, “sabhikkhuajjayaṇa” と呼ばれ, そこに含まれる詩頌はすべて末尾に “sa bhikkhū” の句を有する。*Udāna* 第三章のうちの同類型の詩句群と, その形式, 主題に於て一致するわけである。

第一の例が, 正統思想の通念に自己の主張を対置する形で「真のパラモンとは何か」という問いに答えようとしたものであるのに対し, この例は, 正統思想を一応前提することなしに, 乞食の修行僧はいかにあるべきかを説くのである。

[3] 第三のものはこうである。

tudanti vācāya janā asaṅṅatā sarehi saṅgāmagataṃ va kuṅjaraṃ /
sutvāna vākyam pharusam udīritam adhivāsaye bhikkhu aduṭṭhacitto // (*Udāna* IV. 8)
tahāgayam bhikkhum aṇantasamjayaṃ aṇelisam vinnu carantam esaṇam /
tudaṃti vāyāhi abhiddavaṃ narā sarehi saṅgāmagayaṃ va kuṅjaraṃ // 2
tahappagārehi jaṇehi hīlie sasaddaphāsā pharusā udīritā /
titikkhae nāṇi aduṭṭhacetasā giri vva vātena na sampavevae // 3 (*Āyāraṅgasutta* II. 16)

出家修行者は, 他人から罵詈雑言を浴びせられても, 戦場に於て雨と降る矢をじっと忍んで動ぜぬ象のように忍ぶべし, という主旨で, 上にあげた第二の例と通いあうものがある。

他人からの罵詈雑言, 殴打, 殺傷などは, 沙門思想のきわめて重要な概念である parisrava (パーリの parissaya, ジャイナ資料の parissava, parisaha) の具体例である。戦場の象のように忍ぶ, という表現は, ジャイナ, 仏教を通じて, この parisrava に関して好んで使用されるものである。parisrava の実態は最近の研究^②によって次第に明らかにされつつあるが, さらに網羅的な研究が期待されている。本例は, その資料のひとつとなるであろう。

註① 水野弘元『法句経の研究』(春秋社) p. 5 参照。

② 章名と主題とはほとんど相応しない。

③ 水野前掲書 pp. 73-262, W. Rau “Bemerkungen und Nicht-Buddhistische Sanskrit-Parallelen zum Pāli Dhammapāda”, *Jñānamuktīvālī: Commemoration Volume in Honor of Johannes Nobel*, New Delhi

1959, 水野弘元「経集対照表」(『南伝大蔵経』第二十四卷所収), R. Otto Franke “Die Suttanipāta-Gāthās mit ihren Parallelen”, *ZDMG* 63, 64, 66, W. Stede, “The Pādas of Thera-and Therī-gāthā”, *JPTS* 1924-27, その他。

- ④ Franz Bernhard, *Udānavarga*, Göttingen, Bd I, II. 漢訳のバラレルは, 水野弘元『法句経の研究』p. 8 ff の表と, p. 394 ff の表とを組みあわせれば参照できる。
- ⑤ *A History of Indian Literature*, Vol. II p. 85.
- ⑥ W. Geiger, *Pāli Literatur und Sprache*, §§ 204, 79. 4.
- ⑦ F. Bernhard, *Udānavarga* Bd I p. 399.
- ⑧ 榎本文雄「āsrava の成立について」『仏教史学研究』第22巻1号, 昭54. 10, p. 39 (20)。
- ⑨ metri causa.
- ⑩ “Zu Uttarajjhayaṇa XXV”, *WZKM*, XXIV, 1910. S. 62-9.
- ⑪ 荒牧典俊「Pali parissaya について」『足利淳氏博士喜寿記念オリエント学・インド学論集』, 1978, 谷川泰教「ジャイナ教聖典に見られる Saṃyutta-nikāya 1, 2, 7 の平行句」『密教文化』第132号, 1980. 11。

(1981年度印仏研発表)

昭和五十七年度

研究発表会題目一覧

- 第一回 六月一七日(歴史研究所共催)
 福原 隆善 研究者 善導所居の寺院について
 中井 真孝 史学科助教(歴史研究所) 石窟より見たる飛鳥文化の源流
- 第二回 七月六日
 梁 銀容 助手 高麗仏教史学の発達——『新編諸宗教蔵総録』から『三國遺事』まで——
 久下 隆 研究者 仏性論争における正と邪
- 第三回 一〇月一二日
 明石 和成 助手 逆修会での所作について
 並川 孝儀 研究者 Sir Pratap 博物館(スリナガール) 所蔵ギルギット写本 *Saddharmapuṇḍarikasūtra* に ついて
- 第四回 十一月二九日
 藤井 照之 助手 宝唱の著作における梁世衆経目録
 池見 澄隆 研究者 <逆修>考——中世信仰史一面——
- 第五回 十二月二〇日
 勝木 太一 助手 *Nānarupāsāna* の心所相応論
 岸 一英 研究者 三輩段再考——その訓詁法について——
- 第六回 一月二八日
 稲岡 誓純 助手 康僧会について
 本庄 良文 助手 シャマタデーヴァ 俱舍論註の引用文献
- 第七回 二月七日
 前川 重洞 助手 中論の研究——*anīrodhady-asta viśeṣaṇa* に ついて
 梶田 善夫 助手 説一切有部の一問題点について
 清水 澄 研究者 天国へのはしご
- 第八回 三月三〇日
 妹尾 匡海 助手 観音信仰を中心とする教団群について——その現況と特色——
 神谷 静治 助手 最近の経量部説研究管見
 松永 知海 助手 独湛について
 三枝樹隆 善研究者 善導教学における観の問題について